

系植物を豊富でイヌブナ、アオハダ、ハウチワカエデなどの落葉広葉樹を含んでいるのが特徴である。シラカシ、シイノキがこの群落内にみられることは興味あることで、これらが自然分布かどうかは検討を要することであるが、成木のほかに若木や稚樹などもみられることから自生状態になっていることは確かである。とくにシイノキの分布は貴重で亶理町称名寺のシイノキは樹令550年と推定される大木であり、天然記念物に指定され、分布の北限といわれ県下唯一のものである。もしこの高館山のシイノキが自然分布と考えられ

るならば、宮城県の第二の産地で、太平洋側における分布の北限であると考えられる。

このように高館山のモミ・ウラジロガン林は小面積ではあるが、学術的に価値が高く、この附近の自然を知る上に重要な手がかりを与えるものと思われる。また、この神社の境内には樹高32m、胸高直径115cmのコヤママキがあり、宮城県では最大級のものと推定され、これら合せてこの地域を大事に保護する必要があると考えられる。

宮城県内植物群落調査ノート (1)

東北大学理学部生物学教室 菊池多賀夫

1. 手倉山ブナ林

日本列島のブナ林は大きく2型に分かれることが知られている。1つは日本海側に分布してブナとチシマザサの結びつきに代表される型で、他の1つは太平洋側に分布するブナとスズタケの結びつきに代表される型のものである。宮城県では脊梁山脈に広くブナ林が残されているが、これは日本海型のブナ林で、太平洋型のブナ林の例として知られているものは多くはない。ことに広い面積にわたって残されているものとなると、金華山島のものほかほとんど知られていなかった。手倉山ブナ林は、手倉山の山頂から北斜面にかけて相当地に広い面積にわたって残存しており、林相もよく保存されている。まだ群落的な調査はないが、北限に近い地域の太平洋型のブナ林の例として貴重なものである。

次に群落調査の1例を記す。将来の本格的な調査の参考になればさいわいである。表中の群落調度はブロンブランケの優占度(左)と群度(右)である。

標高660m, 方位N20°E, 傾斜角度15°, 1972年9月26日調査。

高木層: 6—20m, 植被率100%,

ブナ 3.3, イヌブナ 2.1, ミズナラ 2.1, モミ 1.1, ヒトツバカエデ +, ホウノキ +, アズサ +
亜高木層: 2—6m, 植被率20%,

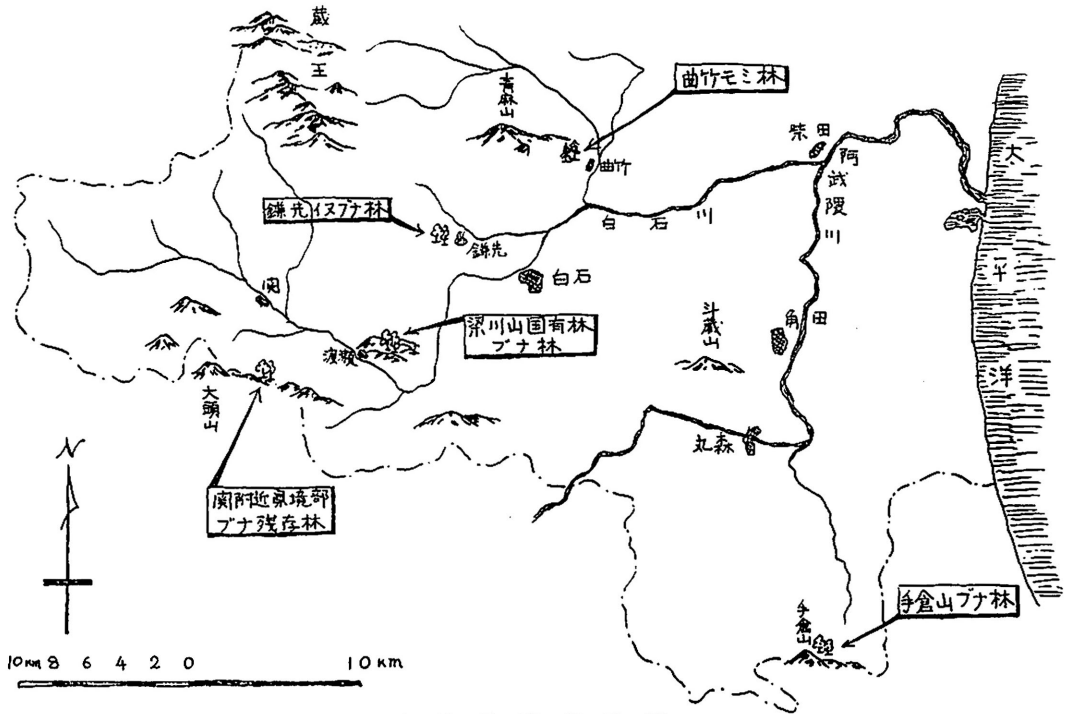
シロヤシオ 1.1, コシアブラ 1.1, リョウブ +, アカンデ +, タカノツメ +, マンサク +, シラキ +

低木層: 40cm—2m, 植被率30%,

ブナ 1.1, ヒトツバカエデ 1.1, シロヤシオ 1.1, イヌブナ 1.1, ヒロハツリバナ +, オオバクロモジ +, ミヤマガマズミ +, ヤマウルシ +, ナツハゼ +, オトコヨウゾメ +, アズキナシ +, コハウチワカエデ +, バイカツツジ +, ツクバネウツギ +, トウゴクミツバツツジ +, リョウブ +, ツクバネ +

草本層: 0—40cm, 植被率40%,

オヤリハグマ 1.1, シロヤシオ 1.1, リョウブ 1.2, イワガラミ 1.2, ハウチワカエデ +, ウリハダカエデ +, オクモミジハグマ +, ツクバネソウ +, ウスノキ +, マンサク +, ウスバサイシン



宮城県南部略図

+, マルバアオダモ +, ウラジロノキ +, アキノ
キリンソウ +

2. 梁川山国有林ブナ林

脊梁山脈のブナ林は日本海型に属し、阿武隈山脈に太平洋型ブナ林が存在するとすれば、両者の境界を追求することが、興味ある大きな問題となる。梁川山国有林は天然記念物材木岩の裏手にあたる地域で、ここに残存するブナ林は組成からみて太平洋型に所属する。この林は間伐の跡が明らかではあるが、なお原生林の林相をしのばせるに十分である。組成についても構造の点でも、この地域の原植生を研究する上では失なわれてならない貴重な残存林であると考えられる。

標高550m, 方位N10°W, 傾斜角度35°, 1972年10月10日調査

高木層：5—15m, 植被率90%,
ブナ4.4

亜高木層：2—5m, 植被率50%,
ウリハダカエデ 1.1, ハウチワカエデ 1.1, タカノ
ツメ 1.1, ヒトツバカエデ 1.1, コシアブラ +,

アワブキ +, マンサク +, ヤマウルシ +, コミ
ネカエデ +

低木層：30cm—2m, 植被率80%,
スズタケ 3.3, ホツツジ 2.2, パイカツツジ 2.2,
トウゴクミツパツツジ 1.1, アオハダ +, オオバ
クロモジ +, リョウブ +, ミヤマガマズミ +,
チンマササ? +.2

草本層：0—30cm, 植被率5%,
シシガシラ 1.1

3. 鎌先イヌブナ林

調査資料にみるとおり、調査区内にブナを含まないが、群落型としては太平洋型ブナ林に属するとみられる。調査区外ではあるが附近にブナを見ることができた。伐採された跡に再生した林とみられ、組成的にも構造上もかなりの攪乱があると考えられるが、地域の原植生推定のためには、この種の林分もきわめて重要な意味をもつ。その点見落すことのできない、注目すべき林である。

標高300m, 方位N, 傾斜角度35°, 1972年10月2日
調査

高木層: 2—8 m, 植被率100%,
イヌブナ 3.3, アワブキ 2.2, マンサク 1.1, メグ
スリノキ 1.1, イタヤカエデ +, ヒロハツリバナ
+, サワシバ +, ハウチワカエデ +, ヤマモジ+

低木層: 30cm—2 m, 植被率50%,
スズタケ 2.2, アオキ +, ヤマブキ +, オオバ
クロモジ +, ケカマツカ +, ミツバアケビ +,
イヌブナ +, ミヤマハウソ +

草本層: 0—30cm, 植被率20%,
チゴユリ 1.1, オオバシヨウマ +, スミレサイシ
ン +, カノツメソウ +, イカリソウ +, エンレ
イソウ +, タチツボスミレ +, セリバオウレン
+, ミツバアケビ +, ウ斯巴サイシン +, ヒメカ
ンスゲ +, タガネソウ +, オオバジャノヒゲ
+.2, オクモジハグマ +, ツクパネソウ +,
シラネアオイ +, オヤリハグマ +

4. 関附近県境部ブナ残存林

タムシバ, ヒメモチ, ハイイヌツゲ, チマキザサな
どの存在からして, 日本海型ブナ林に属するとみるべ
きである。太平洋型ブナ林が存在する梁川山国有林と
の地理的關係からみて, 日本海型ブナ林地域の東端に
近い位置にあると考えられる。したがって関から梁川
山一帯に日本海型ブナ林から太平洋型ブナ林への移行
が見られるはずである。小原温泉から七ヶ宿一帯にわ
たって比較的多数のブナ残存林をみる点も非常に好都合であるし, ブナ林の両型についての比較検討や地域的研究, 環境論等のために, 極めて興味深い地域である。

標高590m, 方位N80°E, 傾斜角度15°, 1972年10
月10日調査

高木層: 4—15m, 植被率100%,
ブナ 5.5, ウリハダカエデ 1.1, ハウチワカエデ
+, コシアブラ +, マンサク +,
亜木層: 1.5—4 m, 植被率20%,
ブナ 1.1, タムシバ 1.1, マンサク +, シロヤシ
オ +, リョウブ +, コシアブラ +, ヒメコマツ r

低木層: 30cm—1.5m, 植被率50%,

チマキザサ 2.2, ヒメモチ 1.1, オオバスノキ
1.1, タムシバ 1.1, ハナヒリノキ +, ウワミズザ
クラ +, ツクパネ +, バイカツツジ +, ミヤマ
ガマズミ +, リョウブ +, ウスノキ +, ヤマウ
ルシ +, ハイイヌツゲ +, オオバクロモジ +,
コバノトネリコ +, ウラジロヨウラク +, ムラサ
キヤシオ +, ホツツジ +, タカノツメ +

草本層: 0—30cm, 植被率5%,
チゴユリ +, ツルアリドウシ +.2, イワガラミ
+, イワウチワ +.2

5. 曲竹モミ林

落葉広葉樹林帯と常緑広葉樹林帯の間にモミ林帯を
認めるかどうかという問題について, 現状では意見は
一致していない。筆者のみるかぎり, 組成的にモミ林
特有の種はモミ以外に認めることはむずかしい。落葉
広葉樹林(この場合, 太平洋型ブナ林)に共通する
か, 常緑広葉樹林に共通するか, 又は両者の要素を含
むか, いずれにしてもそのような組成を持っていると
考えられる。従ってこの群落の組成的な独立性はかなり
弱いもののように思われる。しかし景観論としては
また別の問題で, 落葉広葉樹林とも常緑広葉樹林とも
ちがう独立の景観をもっていることを認めないわけに
ゆかない。加えて, 少なくとも宮城県内では, モミ林を
原植生の残存林又はそれに近いものとみた場合, つな
ぎあわせて一つの植生帯を形成するとみても, 特に不
自然は無いほどの頻度で存在する。その多くのものは,
組成がブナ林(太平洋型)に似通ったものであるが,
なかで常緑広葉樹林の要素を伴ったものが少数見ら
れる。もっとも典型的な例は, よく知られている角田
市斗蔵山のもので, ここではウラジロガシが優占して
いるが広くみれば, モミとウラジロガシの混交林とみ
ることもできる。下に記す曲竹のモミ林も, 同様の形
をもつ一例で, 興味ひかれるものがある。この場合
はウラジロガシと共にイヌブナ, イヌシデなどブナ林
要素が混生し, 移行的性格が強くあらわれている。間
伐で荒廃がめだつが残存林としては類例の少い, きわ
めて貴重なものと考えられる。

標高160m, 方位200m, 傾斜角度25°, 1972年9月
19日調査

高木層: 8—20m, 植被率90%,

イヌシデ 3.3, モミ 2.2, アサダ 1.1, カスミザ
クラ 1.1, カヤノキ 1.1, ウラジロガシ 1.1, イ
ヌブナ +, イイギリ +, イタヤカエデ +, ケヤ
キ +, コナラ +

亜高木層: 2—8m, 植被率30%,

カヤノキ 1.1, ムラサキシキブ 1.1, カスミザクラ
+, イタヤカエデ +, コハウチワカエデ +, ヤマ
ウルシ +, カラコギカエデ +, スギ r

低木層: 30cm—2m, 植被率60%

アオキ 2.2, ムラサキシキブ 1.1, アズマネザサ

1.2, イヌガヤ 1.2, オオバクロモジ +, テンニン
ソウ +.2, ハクウンボク +, キブシ +, アカシ
デ +, コハウチワカエデ +, ハナイカダ +, サ
ンショウ +, ヒロハツリバナ +, ウラジロガシ
+, アワブキ +, ガマズミ +

草本層: 0—30cm, 植被率60%,

オオバジャノヒゲ 3.3, ヤブコウジ 1.2, チゴユリ
1.2, カノツメソウ +, ヤマユリ +, ミツバアケビ
+, ウラジロガシ +, ツルマメ +, ヤブレガサ
+, ミミガタテンナンショウ +, ツタウルシ +,
ヒトリシズカ +, カモメヅル +, チヂミザサ +,
ヤマカシユウ +, エビネ +.2, ツルマサキ +,
ジャノヒゲ +.2